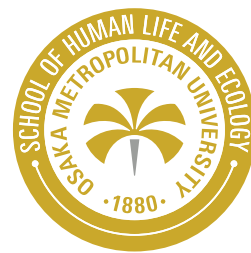


在学時代から相撲部屋おかみまで

長岡恵さんの出会いと軌跡。

大阪公立大学 生活科学部同窓会 講演会／2024.June



しなやかな心を持って
予想外を楽しむ





1. 合格発表の日、生活科学部の前で。
2. みんなの心がひとつになったボート祭。
3. 生活科学部の同級生とキャンパスで。
4. 軟式野球部のマネージャー時代。

大阪公立大学 生活科学部同窓会 講演会
在学時代から相撲部屋おかみまで

長岡恵さんの 出会いと軌跡。

講演者 長岡恵様
司会 大学院生活科学研究科 篠田 美紀教授

長年企画を温めておりました長岡恵さんの講演会を、2024年6月15日の大阪公立大学生活科学部同窓会総会に引き続き開催いたしました。長岡恵さんは昭和60年に生活科学部児童学科をご卒業されました。その後、富士通株式会社に入社され、昭和61年に大関朝潮とご結婚されて、最年少で相撲部屋のおかみさんになられたご経歴をお持ちです。今回の講演会では、若松部屋から高砂部屋を経て、35年間にわたり、相撲部屋を支えてこられたご経歴を、懐かしいお写真や在学中のことも交えてお話いただきました。

生活科学部同窓会への思い

昨年は、夫が急逝するという突然の出来事で、多大なご迷惑とご心配をおかけし、誠に申し訳ございませんでした。本日、このような機会をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

私は大阪市立大学東京支部の有恒会に参加した際、先輩方からお声をかけていただいたことをきっかけに、同窓生との交流が始まりました。卒業後も相撲を通して同窓生の方々との親交を深め、さまざまな交流活動を通じ、頼もしい先輩方や夢あふれる後輩たちとの繋がりが広がっています。このような素晴らしい出会いから、新たな世界が開けるのを楽しみにしています。

実は今日、何十年ぶりにキャンパスを訪れました。私たちが在籍していた児童学科は廃止され、大学も大阪公立大学に変わったと聞いており、すっかり様変わりしているだろうと思っておりました。しかし、訪れてみると、当時とほとんど変わらない雰囲気が漂っており、今でも平野先生や坂本先生に「こら！」と叱られる声が聞こえてくるようで、懐かしい気持ちに胸がいっぱいになりました。

在学中は、自分が将来同窓会で講演をするなど想像すらしていませんでした。しかし、大阪市立大学で学んだことや、多くの先生方、同級生、

先輩方からいただいたご指導が、その後大いに役立っていると感じております。還暦を迎えた今、改めて皆様にご恩返しをしたいという気持ちで胸がいっぱいです。本日は、大阪市立大学で多くの先生方や同級生、先輩方からの学びが、どれほど役立ってきたかをお話しさせていただきますと思います。

多様な背景に触れた大学時代

大学時代は、ボート祭や大学祭で仲間との一体感を楽しむと同時に、チームワークの大切さを学びました。軟式野球部のマネージャーとしては、頼りになる先輩方に支えられ、充実した日々を過ごしました。また、交換留学生としてア

メリカに行き、世界中の人々と国際交流を行い、児童学科の実習では異世代の様々な境遇の子供たちと触れ合う機会を得ました。これらの経験は、後に相撲部屋で多様な背景を持つ人々と接する際に非常に役立ったと感じています。

そして、大学生活で最も大きな出来事の一つが、主人との結婚のきっかけとなった福娘を務めたことです。実は、自分の意思で今宮戎神社の福娘になったわけではなく、茶道部の先輩が今宮戎神社に願書を送って、私を推薦してくれたんです。もしこの先輩がいなかったら、私は元々積極的に何かに挑戦するタイプではなかったもので、福娘にはならなかったと思います。ですが、当時を振り返ると、人に勧められると「じゃあやってみようかな」と柔軟に挑戦できる資質を当時から持っていたのだと思います。



5. 鶴見ライオンズクラブでの国際交流。

6. 福娘に推薦してくれた茶道部の先輩と。



運命に導かれた主人との出会い

上の写真が、主人と結婚するきっかけとなった瞬間を捉えたものです。私は控えめに手を挙げていますが、これはテレビ番組『おはよう朝日です』で、司会の花井悠さんが「朝潮のファンの人、手を挙げて」と言った時のものです。周りには誰も手を挙げる人がいなかったため、「誰も手を挙げないと番組が成り立たないんじゃないか」と思い、控えめに手を挙げました。その瞬間が、この写真に写っているんです。

実は、私は朝潮のファンではなく、その場の雰囲気流されて手を挙げただけだったので、この何気ない瞬間が、私の未来を大きく変えることになるのは、その時は全く思いもしませんでした。

さらに驚いたことに、主人の両親がたまたまこの放送を見ていて、「こんな人がお嫁さんに来てくれたらいいな」と言ってくれていたんです。もしその番組を見ていなければ、私たちの結婚はなかったかもしれません。しかも、主人の両親がその番組を見ていた場所は、なんと私の実家のすぐ近くで、同じお寺の檀家だったんです。世の中は本当に狭く、不思議なタイミングで物事が進んでいくものですね。

しかし、私たちの結婚はすぐに決まったわけではありません。それから1年3か月後、お見合

いの話が突然持ち上がりました。当時、私は大学4年生で、すでに富士通に就職が決まっていた。そんなとき、地元の市会議員さんから「朝潮とお見合いしないか」と電話があったのです。最初は冗談かと思いましたが、富士通での入社後に2週間の研修を終えて帰宅すると、両親から「お見合いが決まったよ」と告げられ、驚きました。一瞬断ろうかとも考えましたが、私は断るのが苦手な性格なので、夫も「きつと断られるだろう」と思っていたにもかかわらず、お見合いに行くことにしました。

お見合いの日のことは、今でもはっきり覚えています。4月27日の夜9時からお見合いの予定でしたが、主人が来たのは11時を過ぎてからでした。なんと、その日、主人は別の方ともお見合いをしていたのです。後で知ったことですが、ダブルヘッダーのお見合いだったとは、今では笑い話です。遅れてきた主人は「酔っ払って遅れた」と言いましたが、その場で私を見て「ビビッ！」と感じたそうです。松田聖子さんの「ビビッ」より早かったと話していましたが、それは酔っ払っていたせいかもしれません(笑)。

その後、主人は毎晩8時に電話をかけてくるようになりました。当時は携帯電話もなかったもので、私は毎晩8時前には家に帰らなければなりません。外出して食事に行くこともできず、今思えば、これは他の人と遊びに行けないようにするための主人の作戦だったのだと感じ

じています。ただ、本当に主人が毎日電話をかけてきてくれたので、とても誠実で真面目な方だということが分かり、私もプロポーズを受けることにしました。

結婚が決まった際、主人は「結婚することになりましたので、今後ともよろしくお願いします」と、朝からずっと多くの後援者に電話をしていました。その姿を見て、私は「この世界は、ただ相撲の稽古が大変というだけではないんだな」と実感しました。

大関と結婚すること

婚約してから結婚までの7ヶ月間、二人きりでデートしたのはたった30分だけでした。その短い時間、手をつないで歩きましたが、いつも付き人や周りの人がそばにいて、二人だけの時間はほとんどありませんでした。主人は「結婚したら二人の時間が増えるから、ゆっくり話そう」「大丈夫。君は僕と結婚するんだ。大関朝潮という肩書きと結婚するわけじゃないから、相撲部屋のおかみなんてしなくていい」と言っていました。22歳で結婚した私は、当然のように新婚生活に夢を抱いていました。

しかし、主人は先輩から「嫁を甘やかしてはいけない」と言われていたようで、結婚後はとても厳しい夫になりました。最初の頃は、実際の結婚

生活は想像とは異なることばかりで、「いつ帰ろうか」「いつ離婚しようか」と思うこともありました。

大関には10人の付き人がいて、食事の準備も相撲取りの体を支えるため、私も栄養を考えて1日に10種類のメニューを作るよう自分に課していました。ですが、すぐに挫折してしまいました。結局、主人は「とにかく素材さえ良ければ、焼いたり煮たりしてくればいいから」と言ってくれました。どうやら、主人は凝った料理よりもシンブルな田舎料理が好きだったようです。主人のお母さんも田舎からたくさん野菜を送ってくれました。

しかし当時は、夜8時以降の長距離電話は料金が高く、主人の母とも短い会話しかできず、なかなか母の味をうまく再現することはできませんでした。

んでした。それでも、なんとか工夫して料理を作り、主人はそれを無理して食べてくれていたように思います。

主人は地元や両親をとっても大切にされていて、「巡業中は大阪に帰るのと同じくらい、室戸の実家にも帰りなさい」と言われました。主人の実家である室戸は、私にとって友達も遊びに行く場所もないところでしたが、その分、主人の母から主人の子供時代の話がたくさん聞くことができました。主人がいかに愛されて育ったか、大きな体を持ちながらも子供のように純粋な部分があることを知り、後に私自身が相撲部屋のおかみとして多くの弟子を見守る中で、主人の母の言葉の意味がよく分かるようになりました。大きな体を持つ弟子たちも、内面はまだ子供で、不安や寂しさを抱えていることを実感したのです。



1. 今宮戎神社の福娘で取材された際。
2. 富士通に入社した頃の1枚。
3. 婚約の際、大関朝潮と並んで。



1. 高砂部屋のちゃんこ鍋は美味しいと評判がよかった。
2. 高砂部屋で親方と。
3. 国技館の上に飾ってあった優勝額。

苦勞した若おかみ時代

私は27歳で若松部屋のおかみになりましたが、結婚当初から大関の夫に仕えていたため、すでに10人の付き人の世話をしていました。例えば、みんなで出かける際にはおにぎりを握り、誕生日や昇進時にはプレゼントを準備するなど、日常的に多くのことに気を配っていました。分からないことも多かったので、何をすることも主人に相談し、勝手な行動をしないよう心がけていました。

先代の横綱朝潮の奥様である先輩のおかみさんは、関西の温かみとは異なり、江戸っ子気質のクールな方でした。「聞いてこない限り教えない」というスタンスでしたが、場所前の番付発表の際には「みんなにおやつやちよつとした心遣いをしなさい」というアドバイスをいただきました。また、「よその部屋のおかみさんたちと気軽に喋らないように」「稽古場にも気軽に顔を出さない」とも教えていただきました。しかし、先輩のおかみさんからは「とにかく男の世界と女の世界は違いますから」と言われ、こちらから聞いてもほとんど教えてもらえず、何をどう聞けばいいのかも分からないまま、結局は主人に細かく相談していました。

その後、私の下にも若いおかみさんたちが入ってきました。主人は大雑把な性格で、部屋の会計や書類仕事はすべて私が担当していました。おか

みになった当初は分からないことも多く、自分が苦労した経験があったので、次のおかみさんたちには自分が知っていることを先に教えてあげようと思っていました。新しいおかみさんたちには「うっとうしがらないでね。少しでも助けになれば」と思っているだけだから」と女性同士のサポートの大切さを伝えました。

弟子達の心に寄り添って

相撲部屋での生活は驚きの連続です。床のタイルが磨きすぎて取れてしまったり、テーブル

の脚をつけるように頼んだら天板が壊れてしまふなど、普通の家庭では考えられない出来事が日常茶飯事です。涙あり、驚きあり、笑いあり、悩みながら試行錯誤を繰り返す毎日を楽しみつつ、時には厳しく、時には弟子たちと笑い合いながら過ごしてきました。

また、おかみの役割には、家族のように弟子たちを支えることも含まれています。例えば、15歳で入門してきた若い力士が、ある日、部屋のことを壊して隠してしまった時、私は「なんでそんなことをするの!」と叱りました。すると、その大きな体の力士が泣き出してしまい、まだ心は子供なんだと気付かされたのです。自ら苦労の多い世界

に夢を抱き、入門してくる中学を卒業したばかりの若い力士たち。それ以来、そんな彼らの気持ちに寄り添うことを心がけるようになりました。

無我夢中で駆け抜けた35年

力士たちや夫のために、おかみさんとして後援会の対応や部屋の経営を切り盛りしてきました。力士たちの大きな体で壊れる備品や建物の修繕も欠かせません。季節ごとの行事やしきたりを大切にしながら、無我夢中で過ごしているうちに、気がつけば35年が経っていました。

思春期の子供たちの問題にも直面し、育てた横綱が世間を騒がせることもありました。そのたびに自らの行動を反省し、対応を考える中で、大阪市立大学で学んだことに救われたことも多々あり、感謝しています。

この35年の間には、親も子も意識が変わり、力士の育った環境も多様化してきました。コンプレックスや社会の変化に伴い、少子化の影響もあって、今後の角界はますます難しい時代になりそうです。

今まで応援してくださった皆様には感謝の気持ちしかありません。

伝統と時代の変化が交錯する中で、夢を真っ直ぐに追いかける若者たちを、これからも応援し続けたいと思っています。



4. 高砂部屋の集合写真。
5. 朝青龍の横綱昇進。
6. 朝乃山の初優勝。



大阪公立大学
生活科学部同窓会
School of Human Life and Ecology

2024年11月発行 編集・発行 大阪公立大学 生活科学部同窓会
〒558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本3丁目3-138／TEL 06-6605-2801

© 2024 大阪公立大学 生活科学部同窓会
本誌の一部あるいは全部を無断で複写、転記・転載することを禁止します。